



地元野菜を困っている人たちに

町田駅に次いで市内2番目の乗降客数を数える東の玄関口、鶴川。そこでは、お店や家庭で余ってしまった食料品を、子ども食堂や一人暮らしの高齢者など、支援が必要な家庭に配布するフードバンクの活動が行われている。フードバンクというと、缶詰のような日持ちする食品を集めるのが一般的だが、鶴川では農家の方々と協力し、地元でとれた新鮮な野菜を届ける活動を行っている。

金井で農業を営んでいる大石正幸さんは、売れ残った野菜の処分に困っていた。フードバンク設立の話を聞き、生産者としてぜひ協力したいと立ち上がった。

「生産者としても丹精込めて作った野菜を、余ったり規格外だったりで処分してしまうのは後ろめたいんだよね。それを食べてもらえる人たちに届く仕組みがあるのなら、ぜひやろうということになった。」

大石さんの声掛けに、JA町田市鶴川支店野菜部会の53人は、すぐに賛同した。声をかけたその日のうちに、野菜が集まり活動が始まった。

夕方、JA町田市アグリハウス鶴川で売れ残った野菜を、生産者が鶴川市民センターの地域活動室に持って行く。届いた野菜の情報は、地域活動室のボランティアの方が支援団体にLINEで共有し、翌日には支援が必要な家庭に野菜が届く仕組みだ。

子ども達からは、お礼のメッセージカードが届くという。「『野菜おいしかったです』とか『鶴川で野菜作っているなんて知らなかった』と書いてあるんです。支援団体から野菜を受け取り、お母さんに持って帰るんだって嬉しそうに大きな白菜を抱えていく話を聞くと、涙が出てきちゃうよね」と大石さん。かつてどこにでもあった人情と地元のつながりが、今ここにある。

1 協力している生産者の皆さん。JA町田市アグリハウス鶴川で農産物などの販売を行っている。 **2** 地域活動室に常駐しているボランティアが、LINEでその日の野菜の情報を共有。それを見た団体が野菜を取りに行く仕組みだ。 **3** 鶴川地区協議会のボランティア長谷さん。子ども食堂でボランティアをしており、そこにフードバンクの野菜を届けている。「困っているご家庭にお野菜を持っていくと、本当に喜ばれるんです。地域がちょっとずつつながって暮らしやすくなっていくと良いと思います」。自身も地域とつながることで、楽しみながら活動をしているという。



取材中に出会ったネコ。畑の片端で昼寝中。

大石さんの畑のブロッコリー。葉っぱをムクドリが食べにくるという。